

源氏物語「西の京の乳母」の呼称変化

——物語の方法として——

外山 敦子

一、〈老女房〉の呼称と場面の連関

『源氏物語』には、さまざまな年齢の女房が登場している。『うつほ物語』や『落窪物語』など他の物語文学と比較しても、『源氏物語』では年齢による女房の呼び分けが多くなされておられ、これを物語構築の一方と捉える立場から、女房の特性も〈若い女房〉と〈年配・老齢の女房〉というように年齢で区切って論じられることが多かった。⁽¹⁾特に、一般に〈老齢の女房〉、すなわち〈老女房〉に分類される女房たちについては、その特性が意図的に物語内に取り込まれていると考えられている。⁽²⁾

ところで、これら〈老女房〉を〈老〉とわれわれが判断している基準は、稀に年齢が明記される女房を除くと、「老いしらへる人」などのような、彼らを示している呼称の中に限定されるといってよい。主要人物とは異なり、端役にすぎない〈老女房〉の呼称は、読み手にとって重要な情報源のひとつとして機能しているのである。しかし、一口に〈老女房〉と言っても、『源氏物語』において、その呼称の用例は多岐にわたっている。⁽³⁾『源氏物語』に登場する〈老女房〉は、

《若い女房》に対する《老齡の女房》というような二項対立的な単純なものではなく、その機能もまた、それぞれの呼称の用例に応じて複雑多岐にわたっているのではないだろうか。したがって、それぞれの《老女房》に用いられる呼称と個々の場面とは大きな連関があるはずだが、これについて論じたものは必ずしも多くはないように思われる。またそれに關連して、同一人物に複数の呼称が用いられている場合、その呼称の変化と、彼らの役割機能の変化との関係性も考えていく必要があるだろう。

本稿では、具体的に夕顔の乳母である西の京の乳母を対象とする。西の京の乳母に対する呼称の変化が、彼女の役割にどのような変化をもたらしていくのか、場面に即して考えてみたい。

二、西の京の乳母と右近の対立

「なにがしの院」で夕顔が変死した後、夕顔に同行した右近が、源氏に夕顔の素性を語る場面がある。そこに、夕顔に乳母が二人いたことが語られている。一人は右近の母である「亡くなりける御乳母」〔夕顔巻・二六一頁〕⁽⁴⁾、もう一人が「西の京の乳母」〔夕顔巻・二六七頁〕である。夕顔に複数の乳母がいたことは、当初下の品と見られていた夕顔が実は三位中将の娘という、相当の身分の女性であったことを裏付けている。⁽⁵⁾しかし、この複数の乳母の登場の意味はそれだけではなかった。養君夕顔を失った乳母たちは、微妙な緊張関係をみせながら、やがて夕顔の遺児玉鬘をめぐって重要な役割を果たしていく。

夕顔の死後、五条の宿の動向が語られる。惟光の周到な事後処理によって源氏の身元は割れず、唯一の手がかりであるはずの右近も源氏方に引き取られたため、夕顔の行方が全くつかめない。その中で、西の京の乳母一族は「右近は他人なりければ、思ひ隔てて、御ありさまを聞かせぬなりけり」〔夕顔巻・二六七頁〕と、右近を恨んでいるように語られる。

右近と西の京の乳母一族とは「他人」であるという理由から、自分たちには夕顔の行方を知らせないのだという西の京の乳母一族の発想は、故乳母の娘である右近と、西の京の乳母一族が、必ずしも一致団結又は融和しながら夕顔に仕えていたのではなく、主人夕顔を奪い合うような緊張関係を続けていたことを窺わせる。⁽⁶⁾

吉海直人氏は、このような複数の乳母・乳母子について、

物語においては、繁雑をさけてか一人の乳母で代表させる場合が多い。複数の乳母が存在する場合でも、その乳母達が同時に舞台上立つことはほとんどない。(略)それ故複数の乳母が同時期に活躍する時には、必ず両者の間に緊張や対抗意識が生じ、それが何らかの形で物語の進展に関与してくることになるのである。⁽⁷⁾

と述べるが、夕顔の「複数の乳母が同時期に活躍する」のは、それから十七年後、玉鬘が大夫監の求婚から逃れて上京し、初瀬に参詣する場面である。

初瀬において十七年ぶりに再会を果たした右近と西の京の乳母は、養君の遺児玉鬘の将来について意見を対立させていく。西の京の乳母が実父内大臣に知らせるべきだとするのに対し、右近は源氏の六条院に引き取らせようと考えている旨を伝える。しかし、西の京の乳母は「大臣の君は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり。まづ実の親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ」〔玉鬘巻・一〇九頁〕と言い、譲らない。西の京の乳母は、玉鬘が、すでに「やむごとなき妻」が大勢いる源氏の、物の数にも入らぬ妾になってしまうのを恐れてのことであり、何よりも、実父が権勢を握る内大臣であることがはつきりしているのに、それを差し置いて源氏に玉鬘を委ねようとするなど納得できないのである。西の京の乳母の発言は、極めて常識的なものであり、その限りにおいては説得力を有すると言つてよい。それに対して、右近の考えである六条院への引き取りは余りにも唐突で、西の京の乳母に対しては何の説得力も持たないのである。そこで、右近は自己の正当性を主張するため、十七年前の夕顔と源氏の関係を明かした上で、西の京の乳母の口を封じるといふ手段に出る。

少弐になりたまへるよしは、御名にて知りなき。罷申に、殿に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、え聞
こえてやみにき。さりとて姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし。あないみ
じや。田舎人にておはしまさましょ〔玉鬘巻・一〇九頁〕

西の京の乳母の夫が太宰少弐に任じられたのは知っていた、つまり、西の京の乳母一族が筑紫に下ったのは知っていたが、まさか時の頭中将の姫である玉鬘を、そのような田舎に同行させるとは思つてもみなかった。一歩間違えば、玉鬘はそのまま一生を田舎で過ごさねばならなかつたかも知れなかつたではないか、として、西の京の乳母一族の当時の対処が軽率であつたことを非難したのである。玉鬘が大夫監という土豪の思ひものにされてしまうという危険に曝されたのは事実であり、西の京の乳母はそれを避けるために一家離散というリスクを負つたといふものの、養君を預かる立場としては許されない失態で、その根本的原因は玉鬘の筑紫同行にあるのである。玉鬘への処遇が不適切であつたことを指摘されては、西の京の乳母は言い返すすべもなく、今回の玉鬘の処遇に関しても、意見をする立場では到底ありえない。右近は、十七年前の西の京の乳母の失態を突くことで西の京の乳母の口を封じたのである。こうして、玉鬘の将来問題については右近の思惑通りに運び、西の京の乳母に対する右近の優位は決定的なものとなるのである。

そもそも初瀬での彼らの邂逅は、長谷霊験譚に属するものだが、これも西の京の乳母擁する玉鬘ではなく、長年の立願が成就する右近にとつての霊験譚として描かれている。⁽⁸⁾複数の乳母・乳母子が同時期に活躍する場であつた初瀬参詣の場面は、西の京の乳母に対する右近の優位を描き、これを機に、玉鬘養育に関する主導権が西の京の乳母から右近へと移行したことを明示しているのである。この玉鬘に対する西の京の乳母と右近の力関係の変化は、西の京の乳母の呼称にも大きな変化をもたらしていく。

三、玉鬘養育権の喪失

西の京の乳母を指す呼称は、全部で十三例を数える。以下、登場順に全用例を挙げる。

1 夕顔卷・二五九頁 会話文（右近↓源氏）

「…西の京に御乳母の住みはべる所になむ、這ひ隠れたまへりし。…」

2 夕顔卷・二六〇頁 会話文（源氏↓右近）

「…とざまかうざまにつけて、育まむに咎あるまじきを、そのあらん乳母などにも異ざまに言ひなしてものせよかし」
など語らひたまふ。

3 夕顔卷・二六七頁 地の文

この家主ぞ西の京の乳母のむすめなりける。

4 玉鬘卷・八二頁 地の文

その御乳母の夫、少式になりて行きければ、下りにけり。

5 玉鬘卷・九〇頁 地の文

心を破らじとて、祖母おとど出であふ。

6 玉鬘卷・九〇頁 会話文（大夫監↓西の京の乳母）

「…おとどもしぶしぶにおはしげなることは、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを、聞こしめしうとむななり。」

7 玉鬘卷・九二頁 地の文

「さてや、こはいかに仰せらるる」と、ゆくりかに寄り来たるけはひに、おびえて、おとど色もなくなりぬ。

8 玉鬘卷・九七頁 地の文

住みつくべきやうもなきを、母おとど明け暮れ嘆きいとほしがれば、…。

9 玉鬘卷・一〇二頁 会話文（右近↓三条）

「まづおとどはおはすや。若君はいかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」とて、君の御ことは言ひ出でず。

10 玉鬘卷・一〇二頁 会話文（三条↓右近）

「みなおはします。姫君も大人になりておはします。まづおとどに、かくなむ、と聞こえむ」とて入りぬ。

11 玉鬘卷・一〇二頁 地の文

老人は、ただ、「わが君はいかがなりたまひにし。…」

12 玉鬘卷・一〇八頁 地の文

「…ただこれを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」と、うち笑みて見たてまつれば、老人もうれしと思ふ。

13 玉鬘卷・一一一頁 地の文

「…いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」と、おとどをうれしく思ふ。

西の京の乳母を示す呼称は、大別すると、①乳母（1、2、3、4）②おとど（5、6、7、8、9、10、13）③老人（11、12）と三分類できよう。以下、それぞれの呼称の用法を具体的に検討する。

①乳母

西の京の乳母に「乳母」の呼称が用いられるのは、右近が源氏に夕顔の素性を語る会話（1）、その右近の話聞いた源氏が玉鬘を引き取りたい旨を右近に打診する会話（2）、五条の夕顔の宿主が西の京の乳母の娘であると語られる場面（3）、後日談として西の京の乳母の夫が太宰少弐に任せられたと語られる場面（4）である。西の京の乳母が「乳母」

と呼ばれるのは、夕顔巻と、玉鬘巻の冒頭のみである。これらは、夕顔死去後のそれぞれの人物の動向を語っている場面であり、いずれも夕顔と西の京の乳母の主従関係を説明的に語る中で用いられている。西の京の乳母に用いられる「乳母」は、夕顔との主従関係を表す呼称で、玉鬘との関係は、夕顔を媒介とした主従関係であることが明らかに語である。

② おとど

「おとど」の呼称は、西国流離から上京にかけての場面で用いられている。玉鬘に対する肥後の豪族大夫監の強引な求婚に、怯えながらも応対する西の京の乳母（5、6、7）や、上京間もないために落ち着いた生活が送れないことを嘆く場面（8）、初瀬で再会した玉鬘付きの下女三条に右近が皆の消息を尋ねる会話中（9、10）、右近が玉鬘の見事な成長ぶりを喜ぶ場面（13）に登場する。総じて、玉鬘の西国流離から上京にかけての困難な時期に、ひたすら玉鬘のために奮闘した西の京の乳母に対して用いられ、会話文中にも比較的多く登場するのが特徴的である。

「おとど」の語義は「オホトノの転」で「女房・乳母などの敬称」とされる。⁽⁹⁾『源氏物語』で、西の京の乳母以外に「おとど」が用いられている人物は、宇治中の君付きの筆頭女房である大輔の君（「宇治より大輔のおとどにとて、もてわづらひはべりつるを。」。「浮舟巻・一〇二頁」）、浮舟の乳母（「このおとどのいと急にもしたまひて、にはかにかう聞こえなしたまふなめりかし。」。「浮舟巻・一一三頁」）などである。これらの用例は、それぞれの女主人に仕えている女房が、彼女たちを呼ぶときに用いた呼称である。大輔の君や浮舟の乳母は、女主人の世話役筆頭として他の女房から敬意の意味をこめて「おとど」と呼ばれたのであろう。西の京の乳母も、大輔の君や浮舟の乳母と同様、玉鬘の実質的な世話役の筆頭としてひたすら玉鬘に尽くしており、そのことに対する敬意が他の登場人物の会話文中にこめられ、またそれが地の文の用例にも拡大していったと考えられる。したがって西の京の乳母の「おとど」には、玉鬘の世話役筆頭女房としての意味がこめられているのだと言うことができよう。

③ 老人

「老人」の語義は「年寄。老人」⁽¹⁰⁾であるが、『源氏物語』中ではかなり人物が限定されていて、身分の低い老齡女房などにしか用いられない呼称である。⁽¹¹⁾西の京の乳母に用いられる「老人」については、特にその場面に注意したい。まず、初瀬での右近との再会の場面で、右近に夕顔の消息を聞き出す西の京の乳母に用いられ⁽¹¹⁾、次に右近と玉鬘の将来について相談する西の京の乳母に用いられる⁽¹²⁾。両場面は、いずれも西の京の乳母が右近と対峙する場面であり、対右近との関係においてのみ「老人」と語り手から呼ばれている。

西の京の乳母は、夕顔を軸として見た場合、その役割は「乳母」であり、玉鬘を軸として見た場合は「おとど」である。従つて西の京の乳母の呼称は、夕顔物語から玉鬘物語への移行に伴つて、極めて明確な形で変化していったといえるだろう。しかし、玉鬘物語の中で西の京の乳母は突然「老人」と呼ばれる。西の京の乳母に「おとど」の呼称が用いられなくなったのはなぜであろうか。

前述の通り、西の京の乳母に「老人」の呼称が用いられる（すなわち「おとど」の呼称が用いられなくなる）のは、初瀬で右近と対峙する場面である。初瀬の場は、物語が西の京の乳母に対する右近の優位を描き、玉鬘養育に関する主導権も西の京の乳母から右近へと移行していく場であつた。西の京の乳母は、右近と再会したことで玉鬘の世話役筆頭女房としての役割を喪失したのである。

養君に対する主導権をめぐる緊張関係が最も高まる両者対峙の場において、西の京の乳母は右近に敗北していく。そして玉鬘の世話役筆頭の座を右近に譲り渡していくのである。そんな西の京の乳母に、物語は、玉鬘の世話役筆頭の立場を保証していた呼称「おとど」を用いない。物語は、これまで西の京の乳母に用いてきた「おとど」の呼称を両者対峙の場で用いないことで、西の京の乳母に対する右近の優位をより明確に表わしたのだと考えられよう。そして、西の京の乳母はすべての立場役割を喪失し、ただの「老人」としてしか存在できなくなっていくのである。

四、語り手としての「老人」

西の京の乳母に「おとど」の呼称を用いないことが、右近の立場の優位をより強調するものだとすれば、「おとど」の代わりに用いられた「老人」という呼称にはどのような意味機能を見出だすことができるのだろうか。つまり、「老人」となった西の京の乳母に、物語はどのような機能を与えたのかということである。西の京の乳母が「老人」と呼ばれた初瀬の場面を、いま一度ふり返ってみよう。

玉鬘の筑紫流離の物語の初巻に、西の京の乳母が神仏に願を立てていることが二度語られる。一つは、夕顔の行方を確認すること（「母君の御行く方を知らむとよろづの神仏に申して：。」〔玉鬘卷・八二頁〕）、いま一つは、玉鬘が上京し人並みの扱いを受けること（「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。：さりともおろかには思ひ棄てきこえたまはじなど言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。」〔玉鬘卷・八六頁〕）である。この二つの大願は、後に無事果たされる。玉鬘の筑紫流離の物語は、西の京の乳母が立てた二つの大願に始まり、それが果たされることで終わる物語であったといえるであろう。

一つ目の大願、夕顔の行方の確認は、初瀬で右近と再会した直後に果たされる。右近は、初瀬の宿で相部屋になった一行を物陰から覗くと、見知った顔の者がいた。亡くなった夕顔に仕えていた下女の三条であった。

この女（三条・外山注）の、手を打ちて、「あがおもとにこそおはしましけれ。あなうれしともうれし。いづくより参りたまひたるぞ。上はおはしますや」と、いとおどろおどろしく泣く。（略）「まづおとどはおはすや。若君はいかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」とて、君の御ことは言ひ出でず。（略）老人は、ただ、「わが君はいかがなりたまひにし。ここの年のごろ、夢にてもおはしまさむ所を見むと、大願を立てれど、遙かなる世界にて、風の音に

てもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老の身の残りとどまりたるもいと心憂けれど、うち棄ててまつりたまへる若君の、らうたくあはれにておはしますを、冥途の絆にもてわづらひきこえてなむ、瞬きはべる」と言ひつづぐれば、昔、そのをり、言ふかひなかりしことよりも、答へむ方なくわづらはしと思へども、「いでや、聞こえてもかひなし。御方は早う亡せたまひにき」と言ふままに、二三人ながら咽せかへり、いとむつかしく、せきかねたり。〔玉鬘卷・一〇二—一〇三頁〕

まず、始めに三条が「上はおはしますや」と右近に夕顔の存否を尋ねる。しかし、右近は三条の問いをはぐらかし、答えようとはしなかつた。ところが、次に「老人」（西の京の乳母）が、ただひたすら「わが君はいかがなりたまひにし」と言い続けると、右近は「答へむ方なくわづらはし」と思いながらも、「御方は早う亡せたまひにき」と答えている。右近は、三条に問われたものには答えなかつたのに対し、西の京の乳母の問いには答えたことになる。つまり、右近の「御方は早う亡せたまひにき」という発言は、夕顔の行方を知りたいがために多くの神仏に願をかけ続けた、西の京の乳母その人に知らされるべき事実だったのである。この時、西の京の乳母に「老人」の呼称が用いられていることは、注意すべきである。

二つ目の大願、玉鬘が都で人数に入れられ、大臣の姫に相應しい待遇を受けることも、右近によってこれが保証され、願は果たされる。

四つの年に筑紫に下つた玉鬘は、かの地で美しく成長した。西の京の乳母の夫少弐は、重病を患い死を目前としたとき、玉鬘の「ゆゆしきまでをかしげなる」〔玉鬘卷・八五頁〕容貌を見て、このまま田舎に残して死なねばならないことを憂い、三人の息子に「ただこの姫君京に率てたてまつるべきことを思へ。」「玉鬘卷・八五頁」と遺言する。また、西の京の乳母は、「母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげ」〔玉鬘卷・八六頁〕な玉鬘に田舎人が求婚するのを忌まわしく思い、玉鬘の上京を神仏に立願する。西の京の乳母や夫少弐は、玉鬘の身分血筋への考慮だ

けで上京を願ったのではなく、むしろ、たぐいまれな美貌の持ち主となつた玉鬘が、このまま都人の目に触れずじまいになることを憂いたのである。この時の玉鬘の美しさは「ゆゆしきまでをかしげ」「品高くうつくしげ」といわれるように、田舎ゆえ他に比較の対象もないことから、極めて不確定な美的判断であつたことがうかがえる。「母君よりもまさりてきよら」であることまでは断定できるが、それ以上の客観的基準を持ち合わせない西の京の乳母側の主観的な美質称賛でしかなかつたのである。

この玉鬘の美貌が上京の後、右近によつて保証される。

「おほえぬ高きまじらひをして、多くの人をなむ見あつむれど、殿の上の御容貌に似る人おはせじとなむ、年ごろ見たてまつるを、また生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりにめでたくおはします。かしづきたてまつりたまふさまも、並びなかめるに、かうやつれたまへるさまの、劣りたまふまじく見えたまふは、あり難うなむ。(略)上の御容貌は、なほ誰か、並びたまはむとなむ、見たまふ。(略)見たてまつるに、命延ぶる御ありさまどもを、またさるたくひおはしましなむや、となむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。(略)ただこれを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」と、うち笑みて見たてまつれば、老人もうれしと思ふ。〔玉鬘巻・一〇七一—一〇八頁〕

源氏の二条院、そして六条院で多くの上の品の人々を見てきた右近は、その中でも紫の上と明石の姫君をこそ、すぐれた美質の持ち主であると称賛する。そして玉鬘は、その紫の上や明石の姫君にも決して劣ることはない、と称賛する。「おほえぬ高きまじらひ」をしてきた右近は、都においても最高の雅びを誇る六条院にその身をおき、いまや美を見極める眼力の水準は高い。筑紫において、西の京の乳母側による曖昧な美質の称賛しかされなかつた玉鬘は、上京すると右近という美質判定者によつて、都において並ぶものとなない紫の上や明石の姫君と比較される。そして玉鬘は、右近によつて、紫の上にも劣ることのないすぐれた美貌の持ち主である、という判断を与えられることになる。玉鬘は、紫の上や明石の姫君という上の品の人々と比較され、同列の扱いを受けたことによつて、自らも上の品として扱われるべき姫君であ

ることを右近によつて保証されたのである。西の京の乳母の二つ目の大願は、こうして果たされたのである。

玉鬘の筑紫流離の物語は、西の京の乳母の二つの立願に始まり、その願が果たされることで終焉を迎える。玉鬘流離の物語が終焉を迎えるにあたって、二つの願が果たされる場面では「老人」（西の京の乳母）が過去をふり返り、他の人物をも過去へと牽引し、過去を総括する場を作り出していく。

「わが君はいかがなりたまひにし」（「老人」の発言）

「御方は早う亡せたまひにき」（右近の返答）

「かかる御さまを、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家竈をも棄て、男女の頼むべき子どもにもひき別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京に参うで来し」（「老人」の発言）

「少弐になりたまへるよしは、御名にて知りなき。罷申に、殿に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、え聞こえてやみにき。さりとて姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし」（右近の返答）

ここでは、老人が自己の見聞を語る、という昔物語の〈語り手〉の在り方がそのまま作中世界に導入されている。玉鬘の筑紫流離という物語を、「老人」という〈語り手〉が自己の見聞として語るのである。二つの大願が果たされるまでの時間の長さは、そのまま「老人」が抱える時間の長さである。過去を総括する〈語り手〉としての西の京の乳母に「老人」の呼称を用いたことで、玉鬘の筑紫流離の物語に時間という重みを加えていく。そして、〈語り手〉である西の京の乳母は、玉鬘の筑紫流離の物語の保証者となるのである。

宇治十帖では、薫に出生の秘事を伝えるという重要な役割を果たす「老人」弁の君が登場する。この弁の君の設定は、物語の〈語り手〉そのものの設定に近いということが、永井和子氏により指摘されている。¹²⁾ 弁の君という「老人」が自己の見聞を〈語り手〉として語る在り方は、西の京の乳母が自己の見聞を語ったかつての〈語り手〉の在り方を、方法的に

拡大再生産したものはあるまいか。『源氏物語』は、始めは影を潜めていた〈語り手〉が、物語の進行とともに徐々に姿をあらわにできてしまっているのではないだろうか。このような役割が肥大化した「老人」の問題については、稿を改めて論じたいと思う。

西の京の乳母は、玉鬘が六条院へ引き取られると物語から姿を消している。雅びの中核的空間である六条院世界では、玉鬘の筑紫流離という過去は抹消され、隠蔽される。西の京の乳母は、しかしその玉鬘流離の保証者である。六条院世界の女主人公として新たに据えられた玉鬘の抹消されるべき過去を保証する西の京の乳母は、すでに六条院世界にとって危険人物と化している。玉鬘を女主人公にした新たな六条院の物語を紡ぎだすため、西の京の乳母は物語からの退場を余儀なくされていったのである。

西の京の乳母は、夕顔物語から玉鬘物語への移行に伴い、その呼称を変え、また、玉鬘流離の物語の終焉に際しては、それまでの過去を総括する〈語り手〉の機能を担った「老人」となり、玉鬘の筑紫流離の保証者となる。物語は、西の京の乳母の役割機能の変化とともに、彼女を示す呼称を変化させていくのである。主要人物とは異なり端役にすぎない〈老女房〉は、彼女たちに用いられる呼称が、彼女たちの果たしている機能を探る上で、読み手にとっての重要な情報源となり得るのである。

『源氏物語』は数多くの端役が多彩な活躍をする物語である。それぞれの端役に用いられた複雑多岐にわたる呼称は、彼らの多彩な活躍とその役割を如実に表現しているのだといえよう。登場人物の呼称を物語の方法として捉え直してみたいとき、今まで見落とされてきたかもしれない、物語が求めた彼らの役割を見出すことができるのである。

注

(1) 清水好子「侍女たち」『源氏の女君』昭和三四年二月(三一書房) ↓再版 昭和四二年六月(塙新書)、蔵永浩子「源氏物語」

の方法」女房の役割をめぐって」女子大文学三四号 昭和五八年三月、沢田正子、「浮舟物語の家司・女房たちの役割」『講座源氏物語の世界八』昭和五九年一〇月（有斐閣）など。

(2) 蔵永浩子「源氏物語」の方法―女房の役割をめぐって― 女子大文学三四号 昭和五八年三月

(3) 「老女房」を示す呼称は、大別すると①「おいびと」②「ねびと」③「おいしらへる」④「ふる」⑤「ほけい」の五分類になる。用例を数字のみ挙げると、①「おいびと」三九例、「おいごたち」一例、「おいたるごたち」一例、②「ねびと」三例、「ねびごたち」一例、③「おいしらへる人」三例、「おいしらへる」二例、「おいしらへる女房」一例、④「ふるびと」一九例、「ふるもの」一例、「ふるごたち」一例、「ふる女ばら」一例、「ふるき女ばら」一例、⑤「ほけたりける人」一例、「ほけほけしき人」一例、である（『源氏物語大成』による）。

(4) 引用は、すべて日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に拠る。なお引用本文には私に傍線を付し、下に巻名と頁数を記した。

(5) 吉海直人「夕顔巻の乳母達」『平安朝の乳母達―源氏物語への階梯―』平成七年九月（世界思想社）

(6) (5)に同じ。

(7) 「乳母のいる風景―夕顔の乳母子右近を中心に―」『源氏物語作中人物論集』森一郎編 平成五年一月（勉誠社）

(8) 小山清文「玉鬘十帖における右近の意義―語り手・視点人物としての機能をめぐって―」『国文学研究』〇〇号 平成二年三月

(9) 『岩波古語辞典 補訂版』平成二年二月

(10) (9)に同じ。

(11) 永井和子「源氏物語のおいびと」「老人」―ことばの意味するもの―『源氏物語の探求15』平成二年一〇月（風間書房）↓「源氏物語と老い」平成七年五月（笠間書院）

(12) 「老人の語りとしての源氏物語―虚構と時間―」『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』昭和五七年五月（笠間書院）↓「源氏物語と老い」平成七年五月（笠間書院）

（博士前期課程二年）